

＝巻頭言＝

平均年齢を下げよう

－創立25周年に寄せて－

創立25年の活動の歴史に思いを馳せますと、山や自然に親しみたい、健康になりたい、友達が欲しいなど多様で小さな個人の気持ちである一滴の水が川という目に見える形となって現れ、悠々と流れている姿に感動します。会誕生から500余名の仲間を迎え入れ、様々な事情で会を離れてしまった人たちが大半です。山友のために尽くし大切な財産を残して会を離れていった方々を思う時、感謝の気持ちが湧いてきます。そして、会ってみたい方々もたくさん浮かんできます。数字的には5名に対し、1名が残っていることになりましたが、多くの方々に注目され、見守られ、声援が聞こえてきそうです。

さて、世の中は高齢化社会の荒波の中であって、高齢者の主役として私たちもリスクに向き合っていかななくてはなりません。日常生活においても、山行を楽しむにあたって多くの制約がかかってきています。多くの会員の皆さんが共通認識として持っていますが、重たい課題です。

昨年取り掛かっている25周年記念事業については、北海道の記念山行も30名の参加者があり、大雪山系のダイナミックな大自然との出会いはいつまでも鮮明に残る貴重な体験・思い出です。四国のみち（徳島県）320.1km、24コースの完全踏破も会員が心を一つにして取り組んだ結果が実りました。残りの記念誌発行、写真展の開催もやがてその成果が記憶と歴史に残って行きます。

現状を思う時、25周年が節目として明日を考え、どのような会を目指すのかを想定しながら、常に耕し種をまいて育てていかないと不毛の地となってしまいます。会員の拡大。会を支える人材の養成。一朝一夕では成し得ない、芽が出るのか育つのかわからない先の見えない話ですが、現状より若い人たちを向かい入れ、共に頑張って平均年齢を下げたいこうではありませんか。

一つの例会山行、一つの会行事をまじめに丁寧に取り組む日常の会生活が大切で、会の限られた資源（会員一人ひとりの力のまとまり）を有効に集中していかないと結果は得られません。会員同士が互いにつながり、居心地がいいという感覚があれば25年の歴史を見てもその可能性はあると思います。

高齢になったからできないという口実を優先、あきらめるのではなく、夢や目標を語り合い、勇気をもってよりよい自分の為に頑張りましょう。

2018年10月

徳島山と友の会 会長 加地幹夫